

絵本でふれるアイヌ文化 — 子どもと保育者の感想の分析から —

島津 礼子¹・掛 志穂²・君岡 智央³
大場由美子⁴・七木田 敦⁵

Ainu culture in picture books: Analyzing the impressions of children and teachers

Reiko SHIMAZU¹, Shiho KAKE², Tomoo KIMIOKA³
Yumiko OBA⁴, Atsushi NANAKIDA⁵

Abstract: Knowledge of the Japanese indigenous Ainu culture is passed on from generation to generation, usually through oral literature in the form of wepeker and yukar (songs and prose), or cultural rituals. In this study, we focused on Ainu picture books based on wepeker and yukar. First, we reviewed 26 Ainu picture books with the aim of identifying distinctive structures and world views. Next, we selected five books and gave them to 15 kindergarten teachers to use in their classrooms. Then, we conducted a questionnaire survey of the teachers seeking their opinions regarding the Ainu picture books. Two of the teachers read the picture books aloud to the five-year-old children. The results of the survey indicated that eight of the 15 teachers would like to use the Ainu picture books in their early childhood education and care programs. We found that the Ainu picture books included the Ainu world view, which recognizes human beings as a type of creature, and traditional knowledge, which differs from scientific knowledge. Through having the Ainu picture books read to them by their teachers, the children became aware of the Ainu world view and language, which differs from scientific knowledge and the Japanese language, respectively. Children need to learn about Ainu culture and their world view in early childhood education and care programs to make them aware of the diversity that exists in their own country.

Key Words: picture book, indigenous, Ainu, oral literature, read aloud

はじめに

2018年、北海道はその名が冠されて150年目を迎えるにあたり、数々の記念行事が催された。150年前に北海道の名称となる原案を考案したのは、幕末の探検家松浦武四郎（1818～1888年）である。武四郎は、6度にわたる蝦夷地の探査を行い、先住していたアイヌの協力を得て当時としては驚くほど詳細な記録を残している。武

四郎はその後、明治政府からの求めに対し蝦夷地に代わる新たな名称として「北加伊道」を含む6案を提案した。「加伊」の文字を含めたのは、天塩川流域を調査した際に出会ったアイヌの長老アエトモから、「アイヌ語のカイという言葉には、この地で生まれたものという意味がある」と教えられたためである（北海道150年事業実行委員会事務局，2019）。「加伊」の文字は、武四郎の調査に親身に協力したアイヌの人々への敬意の表れでもあった。そもそも蝦夷地という名称も、和人がそう呼び習わしていたものであり、アイヌはこの広大な島を「アイヌ モシリ（人々の静かな大地）」と呼んでいた。「加伊」の字は「海」と改められ、1869（明治2）年8

1 広島大学教育室
2 広島大学附属三原幼稚園
3 広島大学附属幼稚園
4 広島大学附属幼年教育研究施設
5 広島大学大学院教育学研究科

月、太政官布告によって「北海道」という名称が公のものとなった。

一方で、北海道の開拓のシンボルとして道民に親しまれていた札幌市野幌森林公園内に建つ「北海道百年記念塔」は解体されることが決定した(北海道新聞, 2019)。「北海道百年記念塔」は、1970年に開拓100年の記念碑として建立された。100メートルの高さまで伸びる二次曲線の概観、雪の結晶と同じ六角形の塔基底部、ごつごつとした塔表面は、いずれも雪と戦った開拓民の歴史を象徴しているという。市は塔の老朽化や高額な維持費を解体の理由としており、今後は新たなモニュメントを建設するとしている。開拓100年、そして北海道命名150年、いずれもアイヌの人々にとってみれば、自分たちの暮らしが失われた年月に他ならない。

アイヌに対する教育においては、彼ら独自の言語や文化、価値観を廃除し、強制的に和人文化への同化を強いてきた歴史が存在する。しかしながら、アイヌをはじめ先住民と呼ばれる人々は、永い時間をかけて、自然環境と相互に作用し合う中で培ってきた知恵と経験、独自の世界観を有している。彼らの知恵や経験から蓄積された知識は、科学的な知識と対比し、伝統的生態学的知識(Berkes, 1993)とも呼ばれる。彼らの知識や文化、世界観を知り再評価し、保育や教育に取り入れ学ぶことは、幼児、児童の多様性へ理解を促すばかりではなく、わが国で共に暮らすアイヌの人々の、尊厳やアイデンティティの確立の観点からも意義があるものだと考える。

1. アイヌの文化、世界観と絵本

本研究では、保育においてアイヌ文化にふれる方法として、アイヌの言語や知恵、世界観などを題材として作られた絵本に着目する。アイヌ文化は、アイヌ語、文様、楽器、熊送りなどの儀式、口承文芸などが知られている。その中でもアイヌの口承文芸や伝承の話をもとに発刊されている幼児向けの絵本(以下、アイヌ絵本と表記する)は、絵と文章により、アイヌの様々な文化や生活の様子、世界観を表現している。北海道から遠く離れた地域では、アイヌ文化を直接学びふれることは難しいが、絵本や紙芝居は日本の各地において入手し、保育に取り入れることができるものである。アイヌ絵本の特質を明らかにし、保育に用いる可能性を検討することが本研究の目的である。

① アイヌの文化、世界観

まず、アイヌ絵本の基底にある、アイヌの文化や世界観について述べる。アイヌはあらゆる生物の中にカムイ(神)や魂の存在を認め、その恵みを人間が一方的に享受するのではなく、人間がカムイに感謝して祀りを行い、カムイは人間の役に立つことを喜んで人間に肉や皮などを提供するという互酬関係でとらえていた(宮崎, 1996)。この互酬の関係性が顕著に表れているのが、イオマンテである。アイヌはヒグマを肉や毛皮などの山の恵みをもたらす神として敬っていた。狩猟した小熊を育て、丁寧に祀りをして魂を神の世界に送り返した。大切に育てたクマを神様の国に送り届ける儀式だと理解しながらも、実際には胸が張り裂けそうなほどつらく、女性はみな涙を流しながら見送ったという(寮, 2018)。鳥でも獣でも、神の国にいる時は、それぞれに人間と同じような家があり、姿も人と同じであるという認識が、アイヌの世界観である。カムイは、人間の村に出てくるときは鳥や獣の姿に仮装してやってくる。人間が動物を獲ることができるのは、カムイであるそれらの動物たちが、人間に獲られてやってもよいと判断したからであり、カムイは人間から敬われることによって威信を増し、人間はカムイの恩恵によって生かされると考えられている。

アイヌは、狩猟・採取中心の生活を送っていたが、狩りの食糧を補う程度のヒエやアワの栽培、松前藩などを相手に乾鮭や毛皮を売る交易も行っていた。アイヌは食糧となる山菜、治療用の薬草、狩猟用の毒草などが、どこに生えているか熟知していた(町田, 2000)。知里(1956)は、アイヌは、総称としての木や草の名前ではなく、植物の部分の名称だけを認識していたと記している。例えば、フキという植物名ではなく、葉はコリヤム、茎はルイエキナ、ふきのとうはピーネキナ、根はキナサパという部分名称を使っていた。これらはそれぞれに別の用途があり、コリヤムは簡易な小屋の屋根を葺いたり、雨具、鍋の代用として用いられ、茎やふきのとうは食用、根は食用や薬草として使われるなどしていた。このように植物の各部により名称を分けた認識は、植物とアイヌの生活の密接なつながりを表している。

食料の有無は元より、生命や生活が自然に左右されるがゆえに、アイヌは自然や季節、気候の移り変わりに対して、きめ細やかな観察を行っていた。アイヌにとって最も恐ろしいもの

は飢饉であり、「小沢が凍って大人の握りこぶしのような塊があると、その年は洪水がある(萱野, 1996)」といったように、例年とは異なる自然の変化を感じ取り、先行きに警鐘を發することわざがいくつもある。アイヌにとって飢饉とは、洪水や干ばつのみならず、主食としていたサケやシカが川や山に現れないことを意味した。サケが獲れないのは、魚を支配するカムイが袋の中に入れてられているサケを、下界へ降ろしてくれないからだと考え、カムイを敬った。サケそのものもカムイと捉えた。

② アイヌの文化、世界観をテーマとした絵本

彼らの文化や世界観は、主に口承あるいは儀式を通して次世代へと伝えられた。文字を持たないアイヌは、神を謡ったカムイ・ユーカラ(神謡)、聖伝オイナ、英雄叙事詩ユカラなどの詞曲や、ウエベケレと呼ばれる昔話を語り伝えた(千本, 1993)。アイヌ民族の知恵と伝承の話はウバシクマ(祖先からの言い伝えの意)とも言われる。山本(1993)は、これらの物語は幾晩も続けて語られるほど長いものもあり、時には川のせせらぎのように、時には激流のように力強く、高く低く響いて語り進められ、語り手も聴き手も渾然一体となって雰囲気浸ったと回想している。イオマンテの儀式で語られるユカラは、神の国に帰って行くクマのカムイが、話の続きを聴きたくてまたアイヌの世界に来てくれることを願い、一番おもしろくなるところで語るのをやめる習わしがあった。逆に、天寿を全うした老人の通夜に語られる物語は、最後まで語って話を終えていたという(萱野, 2000)。

ユーカラやウエベケレは生活の中で繰り返し語られた、アイヌの日々の生活と深くつながったものであった。その語りには、ドラマ性は元より、聴く人の関心を引き付けるための抑揚や間合い、鮮やかな描写、言葉の選択などの豊かなコミュニケーションの技術が用いられていたと思われる。豊かで磨かれた語りや、子どもをはじめとして聴く者を惹きつけ、彼らの想像力を掻き立てたであろうことは想像に難くない。ユーカラやウエベケレは、基本的に一人称で語られた。熊や狼、キツネ、カワウソ、フクロウ、鮭、トリカブト、神々、半神半人の英雄アイヌラックルなど、語り手がこれらの様々なカムイや動植物、英雄になりきって感情豊かに語ったのである。カムイ・ユーカラにはサケへと呼ばれる繰り返しのフレーズが現れる。例えば『イ

ソポ カムイ』(藤村, 2010)では、「ホーリムリム ホーリムリム」というサケへが現れ、『トーキナト』(津島他, 2008)という物語では、「トーキナト」というサケへが繰り返し現れる。サケへの意味は不明なものが多いが、主人公である神の本来の歌声、あるいは特徴となる動作・性質を表すもの、動作や話の情景を表すもの、叫び・はやし・掛け声など、様々なものがある(藤村, 2010)。このようなサケへは一つとして同じものではなく、物語を特徴づける役割も果たしている(津島他, 2008)。

様々な口承文芸は、アイヌの子どもたちにとっては、ことばを学ぶ機会であるとともに、物語の中に埋め込まれた知識や道徳にふれる機会でもあった。例えば、「ブクサの魂」(萱野, 1993)という物語は次のようなものである。

「小さい鍋の言うことには、ここの村長の妻が病気になった理由は、保存用の山菜のとり方がいけなかった。山に生えている草にも木にも、みな魂があつて、役目があつて、天国から遣わされてきているのに、村長の妻は、山菜、特にブクサ(ギョウジャンニンニク)をとる時に、1本も残さず、しかも根まで引き抜いてしまったのだ。1本残さず根まで引き抜いてしまうと、来年の春に芽を出すことができないので、ブクサの神様は死んでしまうのだ(萱野, 1993)」

このように、自然の再生能力を超えない範囲で資源を利用しなければならないことを伝えている。物語は、「だから今いるアイヌよ、～してはいけないよ。と、〇〇の神様が言いました」といったように、メッセージを發する形で終わる場合が多い。

今日、カムイ・ユーカラやウエベケレなどを元にして絵本が作られ、いくつかの出版社から發刊されている。公益財団法人アイヌ文化財団(旧アイヌ文化振興・研究推進機構)も、2001年からアイヌの歴史や文化について普及啓発を図ることを目的として、アイヌの文化と歴史を題材とした絵本の創作を募って發刊し、北海道内の学校や施設に無料配布するなどの取り組みを行っている。しかし、筆者らの調査によれば、北海道外のみならず、道内の幼稚園、保育所等においてもアイヌの文化を体系的に保育に取り入れている施設は少数である。

③ 研究の方法

本研究では、以下の方法を用いてアイヌ絵本を保育に用いる意義について検討した。まず、アイヌ文化財団から発刊されている絵本や、一般の出版社から発刊されている絵本のうち、現在も入手可能である計26冊について、その特質を考察した。次にこれらの絵本の中から、保育に用いることを前提として、5冊を選定した。アイヌ文化や世界観が表れており、幼児も理解しやすいと思われる作品を選定の対象とした。その1冊である『クマと少年』（あべ, 2018）は、イオマンテを主題として描かれた絵本である。保育者が理解しやすいよう、イオマンテについてより詳しい内容が描かれた『イオマンテ めぐるいのちの贈り物』（寮, 2018）も加えた。そのほかの3冊は、『アイヌとキツネ』（萱野, 2001）、『シマフクロウとサケ』（宇梶, 2006）、『カラスのくろいほし』（うめつ, 2016）である。北海道大学アイヌ・先住民研究センターの北原次郎太氏は、アイヌ絵本の中にはアイヌ文化の本質を飛躍させて描かれた絵本も存在すると述べている（2018年、北原氏へのインタビューより）。その点に注意を払い、アイヌの人から聞き取った物語を元に描かれている作品を選んだ。これらの5冊を保育者に読んでもらい、質問紙調査を行った。質問紙では、5冊の中で印象に残った絵本とその理由、これらの絵本を保育に用いる可能性などについて尋ねた。またこれらの絵本の中から選んで、保育中に読み聞かせをしてもらった。読み聞かせを観察し、園児の感想や反応を観察し記録した。絵本の内容を考慮し、読み聞かせる対象は5歳児とした。以上をを総合して、保育におけるアイヌ絵本の可能性を検討した。

3. 結果

① アイヌ絵本の特質

アイヌ絵本の特質を次のように考察した。第一に、アイヌの絵本では、その世界観に基づき動植物はすべて同等の立場にある尊いものとして描かれ、人の優越性が強調されていない。アイヌの世界では小さな生物や道具類もカムイとして敬われ、大切な役割を果たしている。日本の昔話では、野良で働く人々が時に自分たちを苦しめる領主を、貧しいものや弱い存在のものが打ち負かすような話もある（藤本, 2018）が、アイヌの昔話では、カムイである動植物の物語やカムイとアイヌとのかかわりに纏わる物語が

多い。第二に、アイヌの物語では、多様な生命が命をつなぐためには、持続的な狩猟・採取が必要であったり、ひとり占めしないことが大切であることを示唆している。実際にアイヌはサケがたくさん捕れた時、これはカラスの分、キツネの分、とその皮に切れ目を入れて、野に置いていたという（萱野, 2001）。第三に、アイヌ絵本には、カムイ、アイヌ、コタン、イオマンテといったような、アイヌ語が散りばめられている。多くの絵本はこれらのアイヌ語の意味について、本文中ではなく注や括弧内で示している。アイヌ絵本は幼児にとって、同じ日本に暮らす民族の、日本語とは異なる言語にふれる機会になる。

アイヌの絵本にある物語を、日本や世界の昔話や伝承の話と比較してみると、伝え方や物語の構造において共通する部分も多くある。藤本（2018）は、昔話は民衆により必要なことばで語り継がれた「伝聞」であり、楽しむための作り話であると述べている。「とさ」「げな」「そうな」といった言い回しは、「伝聞」であることをよく表している。アイヌの物語も基本的には一人称で語られるのだが、物語の最後の文章において「～と○○の神は語りました」と、急に語りが第三者に移ることから「伝聞」であると言えるだろう。アイヌ絵本にも、この構造を持つものが多くある。また藤本（2018）は、日本や世界の物語も、楽しくおもしろいだけでなく、物語の背後には、弱い者へのいたわりや、助けた側が助けられる側になり得るといった重要なメッセージが込められているのだという。さらに、物語の構造や語り口は、世界中で共通しており、子どもたちを喜ばせ、簡潔でわかりやすい語りの様式が用いられている。わかりやすくするための技法の一つとして、様々な段階の繰り返しがあり（藤本, 2018）、アイヌのカムイ・ユーカラにもサケヘが用いられていることから、両者に共通する構造だと言えるだろう。

② 保育者を対象とした質問紙調査

保育に用いることを前提として筆者らが選定したアイヌ絵本5冊を保育者に読んでもらい、質問紙調査を行った。質問紙調査を行ったのは、西日本にあるA県内の保育者である。A県は日常的にアイヌ文化にふれる機会には乏しい環境にある。質問紙調査の配布数19部、回答数15部、回収率は78.9%であった。質問紙調査の設問と結果は以下の通りである。

問1. アイヌについて知っていますか。

表1 アイヌに対する認識

よく知っている	少し知っている	全く知らない	無回答
0名	14名	1名	0名

問2. アイヌについて、学校の授業などで学習したことはありますか。

表2 アイヌに関する学習経験

ある	ない	覚えていない	無回答
6名	4名	4名	1名

問3. アイヌが日本の先住民族であることを知っていますか。

表3 日本の先住民に対する認識

知っている	知らない	無回答
12名	2名	1名

問4. アイヌの絵本を読んで、最も印象に残った本はどれでしたか。

表4 印象に残った絵本

クマと少年	アイヌとキツネ	イオマンテ
4名	1名	8名
からすのくろいほし	シマフクロウとサケ	無回答
0名	0名	2名

問5. 問4において最も印象に残った本の理由を教えてください。

回答（抜粋）

- ・『イオマンテ』 神の国に送るという発想はこれまでなく、死ということや、まわりの命とつながっていることを改めて考えさせられた
- ・『イオマンテ』 命をいただく喜び（と悲しさ）を同時に考えさせられたため
- ・『クマと少年』 クマと人間の両方の視点でストーリーが描かれていたこと

問6. アイヌの絵本を保育で使ってみたいと思いますか。

表5 保育にアイヌの絵本を用いる可能性

思う	思わない	わからない	無回答
8名	3名	1名	3名

問7. 保育の中でアイヌの絵本を使ってみたい、または使ってみたいとは思わない理由は何ですか。

回答（抜粋）

使ってみたいと思う理由

- ・アイヌという先住民にあたる同じ国土に共存する人たちの話（実際はあまり身近には感じないだろうが）を、日本という国も多様な人が多様な風習を持って生きているということを示すために、幼い頃に知るのはいいと考える

使ってみたいとは思わない理由

- ・子どもなりに何かにふれるかもしれないが、今の社会とアイヌ文化（特に絵本でよく出てきた神のとらえ）があまりにも乖離しているように思うから。知りたいし知る必要はあると思うが、絵本は難しいと感じた

質問紙調査の回答において、保育者の大多数がアイヌについて学校教育において学んだことがあり、わが国の先住民であることも含め知ってはいるものの、その知識は豊富とは言えないと認識している。5冊の絵本のうち、『クマと少年』や『イオマンテ』が最も印象に残ったという保育者が多かった。命という本質的な事象にふれたことをその理由としていた。アイヌの絵本を保育で使ってみたいかどうか、という質問では、8名の保育者が肯定的な回答をした。否定的な回答をした保育者は、今の社会とアイヌ文化が乖離している点を挙げていた。肯定的な回答の中にも、アイヌ文化はあまり身近なものではない、という意見があった。

③ 読み聞かせによる幼児の感想

2018年9月から10月、A県内の幼稚園2園において、アイヌ絵本の読み聞かせをしてもらった。B幼稚園で読み聞かせをした対象は、5歳児18名である。読み聞かせは計2回行い、担任は計3冊のアイヌ絵本を読んだ。担任が読み聞かせに選んだ本のうち、1冊は、『カラスのくろいほし』というお話であった。『カラスのくろいほし』は、以下のような内容である。

『カラスのくろいほし』

その昔、カラスは今のように真っ黒な色ではなく、虹色であった。しかし、太陽の神様が、オキナというくじらのような怪物に飲み込まれ、世の中は真っ暗になってしまった。カ

ラスはどの生物も困っている姿を見て、オイナの口に飛び込む。無事オイナから太陽を助けたカラスは、頭のでっぺんからしっぽの先まで、こげとすすだらけの真っ黒な姿になってしまった。カラスは手柄をたたえられ、星となって神様に仕えることになった。真っ黒なカラスの星は、見えないかもしれないが、確かにそこにあって見守っている。

担任は、読み終わった後に、子どもたちに「何か思ったことある？」と問いかけた。子どもたちから、下記の感想が発せられた。

- ・なんでまっくろになったカラスは1匹なのに、今いる全部のカラスが黒いんだろう、と思った
- ・カラスは優しいし、頭がいい
- ・なんで太陽がくじらに食べられたのか、わからない

担任は、読み聞かせを終えた後に、「絵本はここに置いておくから、また読んでみてね」と、子どもたちが自由に読めるようにした。

C幼稚園では、5歳児19名を対象に、読み聞かせをしてもらった。読み聞かせは計2回行い、担任は2冊の絵本を読み聞かせた。担任は、子どもたちからの質問と感想にできる範囲で応答しながら読み聞かせを行った。読み聞かせを行った絵本のうちの1冊である『アイヌとキツネ』は、下記のような物語である。

『アイヌとキツネ』

ある夜、アイヌの老人は、どこからか声が聞こえることに気づく。声のする方へ近づくと、1匹のキツネがチャランケ（談判、抗議）をしていた。「こら、アイヌ。よく聞け。サケというものは、アイヌがつくったものではない。もちろんキツネがつくったものでもない。神様がつくったのだ。それをアイヌやクマやおれたちキツネがなかよくわけあって食べられるように、いしかり川のピピリノエケルとピピリノエマツというふたりの神様が、川をのぼるシャケの数を決めているのだ。」キツネは、アイヌの捕まえたサケを一匹だけもらったところ、そのアイヌからあらん限りの悪口を浴びせかけられたというのだ。

アイヌの老人はキツネの言う通りだと感心し、他のアイヌにこの話を伝えた。

『アイヌとキツネ』を読み終わった後、担任は子どもたちに「何か不思議に起こったことある？」と問いかけた。子どもたちから、下記の感想が発せられた。

- ・なんでキツネがしゃべったの
- ・キツネは神さまなの？

担任は、子どもたちの感想を聞いた後、次のように子どもたちに語りかけた。「なんでもみんなで分け合うって大事なことだね。園庭の柿も、青組さんだけじゃなくて、桃組さんにも、カラスにも分けてあげよう。人間がダムとか、堰を作ったから、サケが川をのぼれなくなったということもあるよ。道具は便利だけど、賢く使わないといけないね。」このように話した後、次の釘や金づちを使った活動につなげた。

アイヌ絵本の読み聞かせにおいて、子どもたちには不思議に感じるが多かったようである。感想の中で、ほとんどの子どもたちが「なんで」ということばを発していた。担任は、子どもたちの疑問の投げかけに、共感的に応答していた。子どもたちは、アイヌ、コタンといったアイヌ語を聞いたが、とりわけ意味を深く追求することはなかった。それらのことばの響き、絵の色合いなどを併せて味わっているように見えた。

4. 総合考察

以上の結果から、アイヌ絵本を保育に用いる意義と課題を次のように考察した。第一に、アイヌ絵本の読み聞かせを受けたり、自ら読んだりすることにより、幼児は日常の生活の中で知り得てきたものとは異なる知識や、価値観に触れることになった。『クマと少年』の話では、アイヌの村で少年と共に育てられたクマは、物語中に明示されているわけではないが、アイヌと自身のために喜んで少年の放った矢に射られる。また、『アイヌとキツネ』、『シマフクロウとサケ』の物語では、人と動物はすべて同等の立場にある尊いものとして描かれている。これらは、子どもたちがふれる日常の価値観や、科学的知識とは異なる部分も多いだろう。読み聞かせを受けた幼児は、「どうして」、「なんで」という疑問をさかんに発していたのは、このためだと思われる。

第二に、『クマと少年』や『アイヌとキツネ』の物語には、人や動物が生きていくために、他の動物や植物の命を頂いているという本質的な事象にふれる。人間中心に行動したり、物をひ

とり占めするような行動に対して注意を發している。今日の日常の生活において、幼児のみならず大人も他の生物の命をもらって生きているということを実感しにくくなっている。食物に限らず、身の回りの道具類に対しても、その生産の過程や材料に思いをはせることは少ないのではないか。アイヌの絵本にふれることは、それらを意識する機会となり得るだろう。

第三に、絵本の中で幼児はカムイ、アイヌ、コタン、イオマンテといったような、初めて耳にすることばにふれる。外国のことばではなく、日本においても異なる民族の言語があることを知り、新しいことばの響きやリズムにふれる機会となり得た。これは保育者にとっても、同様であったと思われる。重要なのは、日本語とアイヌ語あるいは日本人とアイヌ、といったように対比的にとらえるのではなく、同じ国の中に異なる文化や言語を持つ人々がいるという認識だと考える。アイヌの人々も日本の人々も、異なる歴史的背景や文化を持つけれど、日本語を話し同じ生活様式を送っているのだから。

アイヌの絵本を保育に用いるための課題は、幼児はもとより保育者も、アイヌに関する知識が乏しい点にある。とりわけ北海道外の地域においては、日常生活においてもこれまでの学校教育においても、アイヌ文化にふれる機会は乏しい。アイヌがたどってきた歴史も含め、社会全体で認識を深めていく必要があると考える。平成29年3月告示の幼稚園教育要領には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つとして、次のように示している。「身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にす気持ちをもって関わるようになる。」アイヌの絵本は、幼児の命あるものをいたわる態度を育てる教材となり得るのではないだろうか。

おわりに

教育学者である安彦忠彦は、「異文化を生きる人に対しても、見えるものの一步奥を探ることで、同じ人間として共通な部分があることを知る教育を」と述べている。とりわけ反差別や多様性尊重の感覚、見方、態度のうち、感覚を早い段階で育成することを説いている(2019年、広島大学附属小学校における講演より)。筆者が北海道において行ったインタビューでは、1970年代のアイヌと和人の子どもたちが共に学

ぶ教室では、アイヌということにふれてはいけない雰囲気があったと語る人がいた。大人たちが差別や偏見を口にしなくても、子どもたちは「ふれてはいけない雰囲気」を敏感に感じ取っていたということだ。2019年の今日においても、若い世代のアイヌの人たちは、学校で自分がアイヌだと名乗ることは葛藤があったという人や、学校の社会の授業でアイヌの歴史を取り上げた時は、自分のことにふれられるのではないかとドキドキしたという声もあった。あるいは逆に、教科書にアイヌのことが載っていたのに、先生がまったくふれなくてがっかりした、という意見もあった(2018年、筆者のインタビューより)。保育においてアイヌ文化や価値観を取り上げることにより、同じ国に暮らす異なる歴史と文化を持つアイヌを知り、両者の共有できる認識を認め合うことが、子どもたちの差別感覚を遠ざけるのではないかと考える。

本研究では5冊の絵本を取り上げて、研究の対象としたが、筆者らの視点から選定したものである。アイヌの世界観が絵本によく表れているかといった点に関しては、アイヌの人々の助言を仰ぐ必要があったと思われる。これについては、今後の研究課題としたい。

引用文献

- あべ弘士(2018)『クマと少年』,プロンズ新社。
- アイヌ民族博物館編(1993)『アイヌ文化の基礎知識』,草風館。
- Berkes, F. (1993) Traditional Ecological Knowledge in Perspective. In Julian T. Inglis (ed.), Traditional Ecological Knowledge: Concepts and Cases. International Program on Traditional Ecological Knowledge, International Research Center, Canadian Museum of Nature, pp.1-10.
- 知里真志保(1956)『分類アイヌ語辞典』,平凡社。
- 知里幸恵(1978)『アイヌ神謡集』,岩波書店。
- 北海道新聞(2019) <https://www.hokkaido-np.co.jp/article/262593> (2019年2月8情報取得)。
- 北海道150年事業実行委員会事務局 <https://hokkaido150.jp/> (2019年2月8情報取得)。
- 藤本朝巳(2018)「絵本・物語が持つ力」田島信元・佐々木丈夫・宮下孝広・秋田喜代美編『歌と絵本が育む子どもの豊かな心：歌いかけ・読み聞かせ子育てのすすめ』199-230頁。

- 藤村久和 (2010) 『イソポ カムイ』, 絵本塾出版。
- 萱野茂 (1993) 『アイヌの昔話:ひとつぶのサッチポロ』, 平凡社。
- 萱野茂 (1996) 『萱野茂のアイヌ語辞典』, 三省堂。
- 萱野茂 (2000) 『パクヨカムイ:ユカラで村をつくったアイヌのはなし』, 小峰書店。
- 萱野茂 (2001) 『アイヌとキツネ』, 小峰書店。
- 萱野茂・どいかや (2016) 『アイヌのむかしはなし ひまなこなべ』, あすなる書房。
- 町田宗鳳 (2000) 『縄文からアイヌへ: 感覚的叡知の系譜』, せりか書房。
- 宮崎正勝 (1996) 「歴史教育における環境主題導入の試み: アイヌの自然観と縄文文化の再評価」『環境教育』 Vol.6-1, 日本環境教育学会, 16-26頁。
- 小川正人 (1997) 『近代アイヌ教育制度史研究』 北海道大学図書刊行会, 106頁。
- 寮美千子 (2018) 『イオマンテ めぐるいのちの贈り物 (北の大地の物語)』, ロクリン社。
- 更科源造・更科光 (1976) 『コタン生物記 (1) 樹木・雑草篇』, 法政大学出版局。
- 参議院「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議案」 <http://www.sangiin.go.jp/japanese/gianjoho/ketsugi/169/080606-2.pdf> (2018年8月28日情報取得)。
- 千本英史 (1993) 「神とつらなる世界の物語」, 萱野茂 (1993) 『アイヌの昔話:ひとつぶのサッチポロ』, 平凡社, 235-242頁。
- 津島祐子・宇梶静江 (2008) 『トーキナ・ト: ふくろうのかみのいもうとのおはなし』, 福音館書店。
- 宇梶静江 (2006) 『シマフクロウとサケ: アイヌのカムイユカラ (神話) より』, 福音館書店。
- うめつゆい (2016) 『からすのくろいほし』, 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
- 山本多助 (1993) 『カムイ・ユカラ: アイヌ・ラックル伝』, 平凡社。

本研究は JSPS 科研費 JP17K18643 の助成を受けたものです。